

# 英文法における認識的モダリティ指導の課題 —地域言語の文法体系の影響—

新垣友子

## 要 旨

第二言語 (L2) 学習者の第一言語 (L1) の文法体系は、第二言語習得にどのような影響を与えているのであろうか。本研究では、英語、日本語、琉球諸語 (沖縄語)、ウチナーヤマトゥグチの認識的モダリティの使用に関して、これら四言語間にみられる意味的な差異を検討し、学習においてどのような問題点があるのかという視点から考察した。

留意すべき点として1点目に、直接的な証拠に基づかない認識的SHOULDの日本語対訳として、確信的根拠を持っている際に使用される日本語「はずだ」が多用されている点、2点目に教える側の地域言語の認知度、習熟度により認識的モダリティの意味理解に個人差がある可能性を挙げた。そして、3点目に認識的SHOULDの日本語訳「はずだ」とウチナーヤマトゥグチの「はず」の意味の差異が大きい点を挙げた。訳に頼るとその差異を見落としがちなことから、実際に目標言語を用いる場面に身をおき実践を重視する教授法を取り入れる必要性を指摘した。

キーワード：第二言語習得、第一言語、教授法、危機言語

## はじめに

第二言語 (L2) の習得の際、第一言語 (L1) の文法体系は、習得にどのような影響を与えるのであろうか。本研究においては、ダイグロシヤあるいは、ポリグロシヤともいえる複数の言語が存在する琉球における地域言語の文法体系が、第二言語習得にどのような影響を与えているのかを考察する。具体的には、認識的モダリティに焦点を当てて、英語助動詞の指導における日本語訳と地域言語の意味的差異を明確化することにより、学習者の混乱を回避し、スムーズな指導を確立することを目的とする。まず、母語と第二言語習得の関係を概観して、本稿で用いる地域言語の定義とその現状の概要を説明する。それから認識的モダリティを中心に英語、日本語、琉球諸語 (沖縄語)、ウチナーヤマトゥグチの各先行研究を踏まえて意味の違いを考察する。そして、今後の文法指導における地域言語への理解の必要性と、翻訳に頼らない教授法導入の必要性を述べる。

### 1. 第二言語習得と第一言語 (母語) の関係性

言語教授法の学習理論は、文法を中心とした教授法 Grammar Method、翻訳を重視した Translation Method、また両者を組み合わせた文法訳読法 Grammar-translation-method (GTM) が主流であったが、アメリカの構造言語学や行動主義理論に基づいた Audiolingual Method、そして Chomsky の生成文

法の議論を経て Communicative approach へと移行してきた。

第二言語習得と母語の関係性については、アメリカの構造言語学や行動主義理論を背景として、L1 と L2 の差異に着目し、特に言語差が大きいところを Pattern practice によって強化・習得を目指す「習慣」強化の教授法が発展した。このような L1 と L2 の対照分析 (contrastive analysis) では、エラーは L1 からの転移 (transfer) であるとされ、Contrastive Analysis Hypothesis (CAH) として 70 年代を中心に検証された。L1 と L2 の違いから全てのエラーを予測することが可能であるという仮説が提唱されたが、その後、それを疑問視する研究結果が提示されている。異なる母語話者の言語習得とエラーの割合を考察すると、そのデータから、エラーは必ずしも L1 の影響とは断言できないという考察 (Ellis 1985 : 29) や、L1 の言語パターンを転移して起こるエラーよりむしろ、学習者が目標言語を習得・確立していく段階で見られるエラーと捉える方が適切という指摘もある (Richards 1970)。同様に、異なる L1 をもつ学習者が様々な L2 を学ぶ際に共通するエラーが見られるという指摘がされている (Odlin 1989)。

このように L2 の習得が難しいことは L1 の転移などが原因であるという L1 の強い影響を訴える仮説は、反例が多く、異論を唱える研究者もいるのは確かであるが、第二言語習得における L1 の影響は、本質的で

中心的な現象であり、L2習得のプロセスにおいて留意すべきであるという指摘もある (Gass & Selinker 1983 : 7)。また、形態素習得の研究事例を包括的に検証すると、L1は確かに発達段階で影響しているとの報告もあり (Lightbrown & Spada 2013 : 47)、やはり注視すべき要因であるといえるだろう。本研究では、L1の影響がエラーの一因となっているとの立場から、具体的な検証を進めていく。

## 2. 母語（地域言語）とは

国内の第二言語習得に関する先行研究は、L1を日本語とする研究が主流であり、地域言語が目標言語にどのような影響を与えているかという研究はまだ多いとは言えない。本研究でこれから述べる琉球における地域言語に関しては、日本語のなかの一方方言という従来の見方ではなく、琉球諸語を「言語」として位置づける。国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、2009年2月に、琉球諸語を危機言語として認定し、琉球弧の6言語（奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語）をその対象とした (Moseley 2009)。宮良 (2011) は、日本語派と琉球語派が共通の祖語をもつとしたうえでジャポニック語族という用語を採用した。両語派の対等性を指摘し、琉球諸語が日本語の方言という認識は今後改められるべきであると述べている。藤田ラウンド (2015) は、琉球諸語と日本語の使用をバイリンガルとして捉えられないかという見地から、宮古島の学校教育で生徒達の動機や興味に働きかけることで言語継承への門戸を開く可能性を検討している。このように琉球諸語は日本語の下位分類ではなく「言語」としての位置付けが認知され<sup>1)</sup>、教育実践として、危機言語継承に繋がる歴史文化教育の導入も研究されるようになってきた。

このような現状を踏まえると、琉球においては、L1が日本語とは言えない現状がある。それでは、琉球におけるL1は琉球諸語といえるのかというと、それほど単純な状況ではない。若者の琉球諸語の継承は危機的状況であることから、L2学習において直接的に影響を与えているのは、琉球諸語と日本語の接触の過程で生まれた変種の方だと言えるだろう。

現在の琉球諸語をL1とする世代は60代以上と考えられており<sup>2)</sup>、若者のL1としての習得は非常に限られている。実際、2016年の琉球新報『沖縄県民意識調査

報告書』によると「聞くことも話すこともできる」と答えた20代は7.5%に過ぎない。その若者達が実際に用いている日常言語は、琉球諸語と日本語の接触の過程で生じた「ウチナーヤマトウグチ」と言われる変種である。

その変種の定義・名称に関しては、様々な角度から研究されてきた。永田は「旧方言」と区別し、琉球独特の共通語を「新方言」と呼び (1996 : 11)、高江洲は、「ウチナーヤマトウグチ」を「琉球方言から標準語に移行する過程で生まれた、方言の干渉をうけた標準語」 (1994 : 246) と定義している。また、真田 (2009) は「標準語」と「方言」の間に中間的スタイルを設定し、どちらの影響をより強く受けているかで層を区分している。他にも「琉球クレオール」<sup>3)</sup> (かりまた 2008)、または「琉球クレオロイド」として準クレオールの捉え方も論じられている (ロング 2010)<sup>4)</sup>。本稿では、高江洲 (1994) の定義を幅広く琉球諸語の各言語に適用し、各琉球諸語が日本語との接触の過程で生まれ独自の発達を遂げてきた言語体系を「ウチナーヤマトウグチ」と呼ぶこととする<sup>5)</sup>。

このような定義を踏まえると、現段階では琉球における英語学習のL1はウチナーヤマトウグチであり、その言語体系がL2習得に与える影響を以下で検討していく。なお、本稿で用いる例文は沖縄語を使用し、接触言語の例は、沖縄語の使用領域（沖縄島中南部）で用いられているウチナーヤマトウグチとする。

## 3. モダリティ研究

この章では、モダリティ研究に関して英語 (3.1)、日本語 (3.2)、沖縄語 (3.3)、ウチナーヤマトウグチ (3.4) でそれぞれの特徴を挙げる。

### 3. 1 英語

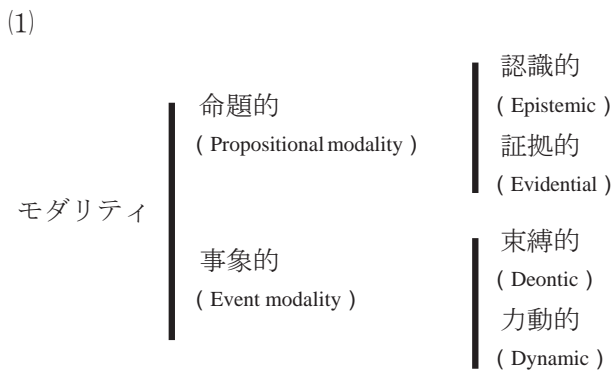
#### 3. 1. 1 モダリティ研究の概要

モダリティとは「命題 (PROPOSITION) に対する話し手の態度の表明を指す」 (Murphy & Koskela 2015 : 156) カテゴリーである。モダリティの研究は、法助動詞、法形容詞、法副詞、仮定法、不変化詞、活用、終助詞など多岐にわたり (Palmer 1990)、理論的・方法論的アプローチも様々である。モダリティのより詳しい定義として、澤田 (2006) は以下のように述べている。

モダリティとは、事柄（すなわち、状況・世界）に関して、たんにそれがある（もしくは真である）と述べるのではなく、どのようにあるのか、あるいは、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。

(澤田 2006 : 2)

Palmer (2001 : 22) は、モダリティを「命題的モダリティ」(propositional modality) と「事象モダリティ」(event modality) に大別し、以下のように下位分類している<sup>6)</sup>。



「命題的モダリティ」とは、「命題に関する話し手の判断に関わるもの」で、「事象モダリティ」とは「起こり得る事象に対する話し手の態度を表すもの」(Palmer 2001 : 7-8) である。命題に対して、「その命題が事実であるかどうかに関する話し手の態度を表すもの」(Palmer 2001 : 24) が「認識的モダリティ」であり、「命題の真実性を支持する証拠に関するもの」が「証拠的モダリティ」(Palmer 2001 : 8) として区別される。また、事象的モダリティには「束縛的モダリティ」と「力動的モダリティ」があり、それぞれ「その事象を引き起こす要因が主語の外側にあるもの」と

「主語の内側にあるもの」(Palmer 2001 : 70) と定義されている。

認識的モダリティは「かもしれない」「だろう」「ちがいない」などの蓋然的推論を示すモダリティで may, might, should, mustなどが挙げられる。証拠的モダリティに関しては、Palmerによれば、証拠的モダリティは英語にはないに等しいとされているが

(1990 : 12)、shouldとmustの使い分けで後述するように、英語でもどのような証拠を元に推論・判断をす

るのか着目されることがある。また、琉球においては、証拠性は重要な言語範疇として体系化されている (Arakaki 2013)。

束縛的モダリティは「せねばならない」「してもいい」など、事象を引き起こす要因が話者自身ではなく、話し手の干渉し得ないところに存在するものを示し、力動的モダリティは、文の主語に内在する「能力」や「意志」などを示す。以下、3.1.2では、命題的モダリティの認識的モダリティに焦点をあててみていく。

### 3. 1. 2 認識的モダリティの意味領域

本研究の中心である認識的モダリティ should, must, may, might, couldの解釈に関して見ていく。shouldが認識的モダリティの中に分類される際、「はずだ」という日本語訳が当てられることが多いが、そのshouldは実際、どのような意味領域を表すのだろうか。

3.2.2で述べるが、日本語の「はずだ」は確信度が高い時に用いられる。現代英語の認識的SHOULDの意味は、(2)のように I think it's probableで言い換えられ、確実性がやや低いにもかかわらず、「はずだ」が訳に当てられている。

(2) *the trip should take about sixteen days*

(W.7.2.30)

(= 'I think it's probable that the trip will take about sixteen days')

(その旅行は約16日かかるはずだ)

(コーツ<sup>7)</sup> 1992 : 78)

このように認識的SHOULDの最も普通の用法では、「話し手が知っている事実に基づいて、自信の無い想定や可能性についての査定」(コーツ 1992 : 77) を表しており、OUGHT TOもその点では共通している (コーツ 1992 : 88)。また、認識的MUSTの中心的な例は「自信に満ちた想定」を表し、認識的SHOULDの中心的例は「自信のない想定」を示すとし (コーツ 1992 : 77)、自信の有無によって使い分けられていると指摘されている。澤田は、mustは現時点で入手可能な直接的証拠に基づいて「断定」しており、should は、抽象的知識 (道理、法則、公式、過去の経験など) に基づいて「予測」しているとして、「断定」と区別している (2006 : 215)。

同様に確実性が低い想定を表す助動詞にmay、mightがあるが、これらの意味範囲とはどのような違いがあるのだろうか。コーツは、『MAYは認識的『可能性』，すなわち、命題の真実例に対して話し手が自信を持ってはいないということを表すことが多い』（1992：156）と述べ、MAYとMIGHTは交換可能で両者とも可能性の査定はほぼ同じ程度の確率と述べている（コーツ 1992：171, 174）。同様に認識的COULDも「その命題に対する自信の無さ」を表しており、ほとんどの文脈で認識的MAYと同義で用いられている（コーツ 1992：193-195）。

これまで見てきたように、認識的SHOULDの中心的例は「自信のない想定」、「抽象的知識に基づく『予測』」を示し、認識的MUSTの中心的な例は「自信に満ちた想定」、「直接的証拠に基づく『断定』」を表すことが分かった。また、認識的MAY、MIGHT、COULDに関しても、「話し手が自信を持ってはいない」例が多かった。MAY、MIGHT、COULDが‘it’s possible that…’/‘perhaps’で書き換えられ、SHOULDが‘I think it’s probable’で書き換えられることから、前者と比べると後者SHOULDの方が確信度は高いことが分かる。

### 3. 2 日本語

#### 3. 2. 1 モダリティの定義と分類

日本語のモダリティ研究の主要な考え方は、命題とモダリティという二つの要素から文が成り立っていて、命題をモダリティが包み込むという階層的な構造として捉えられている（日本語記述文法研究会 2003）。例えば、仁田（1991）では、命題は言表事態、

モダリティは言表態度と呼ばれ、モダリティが命題を包み込むという層状の構造と考えられている。用語の使用に違いはあるものの、このような命題とモダリティとの対立概念は、寺村（1982）、益岡（1991）、中右（1994）など多数の研究の中で指摘されてきた。

蔣（2010）は、一般言語学、および英語学におけるモダリティ研究と日本語学のモダリティ研究は、異なった源をもつとして3点の日本語モダリティ論の特徴を挙げている。1つ目は文機能（文類型）をモダリティとして捉えていること、2つ目に「話し手と聞き手との interaction」をモダリティに取り込んでいること、3つ目に Dynamic modalityが含まれていないことである（蔣 2010：66）。また、上述したように、文の構造を命題とモダリティという二つの要素の結合と捉える視点も日本語のモダリティ研究の特徴的な側面と考えられている<sup>8)</sup>。

このように3.1.1で見た英語学におけるモダリティ研究と日本語に関するモダリティ研究は異なる側面を有するが、分類においてもその違いが見受けられる。表1から分かるように、日本語記述文法研究会（2003）では、モダリティを大きく4種類（i：文の伝達的な表し分け、ii：命題が表す事態のとらえ方、iii：文と先行文脈の関係づけ、iv：聞き手に対する伝え方）に分類している。そして、表1中央の欄が示すように、モダリティの種類を5つに分け、さらに細分化している。このように日本語のモダリティの研究は、テンス、アスペクトなどの文法カテゴリーに比較すると、かなり範囲が広く全体像をつかむのは容易ではない。ここでは全体像を確認するにとどめて、次項では、認識的モダリティの推量に限定して考察したい。

表1. モダリティの分類（日本語記述文法研究会 2003）

文の伝達的な表し分け	表現類型のモダリティ	情報（叙述、疑問）
		行為（意志、勧誘、行為要求）感嘆
命題が表す事態のとらえ方	評価のモダリティ	必要、許可・許容、不必要、不許可・非許容
	認識のモダリティ	断定、推量、蓋然性、証拠性
文と先行文脈の関係づけ	説明のモダリティ	「のだ」「わけだ」「ものだ」「ことだ」
聞き手に対する伝え方	伝達のモダリティ	丁寧さ（普通・丁寧）
		伝達態度（伝達を表す終助詞、確認・詠嘆を表す終助詞、終助詞相当の形式）



### 3. 2. 2 認識のモダリティ

認識のモダリティは、「情報伝達文の構成にあたって、その文によって示される事柄や情報に対する話し手のさまざまな認知的態度を表し分けるものである」

(日本語記述文法研究会 2003 : 134)。認識のモダリティを表現する形式は「だろう」「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」「ようだ」「みたいだ」「らしい」

「(し) そうだ」「(する) そうだ」等が挙げられる。3.1.2 でみた英語の should, must, may, might などの使い分けは、話し手が自信をもって判断しているかどうかに関わっていたが、日本語の認識モダリティはどうであろうか。「だろう」「はずだ」「にちがいない」「かもしれない」に関して概観してみる。

日本語の「だろう」は、自分がこうだと考えるということについて、その根拠をもっていても、相手に知らせる意識はない時に出てくる表現である(寺村 1984 : 227)。また、「だろう」は「積極的に不確実であるという判断を表すのではなく、あくまで、判断過程の内部(結論を出す途中にある)ということを表すだけ」(森山 1995 : 180) という分析もあり、これらの点から、不確実性や推論の根拠を積極的に示す表現ではないととらえられる。

一方、「はずだ」は、ある事柄について、確信的には言えないが、自分が現在知っている事実(P)から推論すると、当然こう(Q)であるという時、または自分の推量ではなく事実(P)から当然こう(Q)なる、という状況にあることを相手に伝える際に用いられる

(寺村 1984 : 266)。また、「はずだ」は、「そう判断する論理的根拠があることを示す形式」(森山 1995 : 174)、「単なる確信ではなく、かなり確かな根拠をもとにした確信」(三宅 1995 : 194)と述べられており、「だろう」に比べて論理的根拠(判断理由)が重視されると指摘されている。また、これらの用法に加えて、「条件の真相を知って現状が当然の結果であったと悟る場合」(森田 1980 : 410)も挙げられているが、沖縄語、またはウチナーヤマトゥグチはその用法は持たないことが報告されている(Arakaki 2015)。

「ちがいない」の使用に関しては、「だろう」の例と対照的に、「不確実ということを積極的に表す」事が指摘されており、「わからないなりに、その主張だけに確信をもつ」(森山 1995 : 180)とされ、不確実で高い確信がある時に使用される。野田も「違いない」

に関して、「事実であることを確認していないので断定することはできないが、話し手がそのことに対して強い確信をもっているということを表す」(1984 : 112)と述べている。

また、「かもしれない」は「話し手がある事柄を推量するのであるが、その推量が当たっているかどうかには自信がないということを表すのが基本」(野田<sup>9)</sup> 1984 : 114)という指摘がある。「かもしれない」を使用する時の真実の確立性は、ほぼゼロに等しい時から7, 8割を超えそうな場合まで、かなり幅が広く、「『にちがいない』と言えない場合のほとんどをカバーしているようである」(野田 1984 : 115)と意味範囲の広さが言及されている。

このように「はずだ」が論理的根拠を重視する一方、「だろう」や「にちがいない」は判断の根拠が重視されない、または提示されない傾向があることが分かる。そして「かもしれない」は可能性の幅は大きい、推量に関する自信の無さを示すことが指摘されている。

### 3. 3 沖縄語

琉球諸語・沖縄語の動詞を中心とした文法研究は多いが、モダリティに特化した総合的・体系的な研究は少ない<sup>10)</sup>。沖縄語には、前章で挙げた「だろう」「はずだ」「にちがいない」「かもしれない」にそれぞれ対応するような表現はなく、いいきりの形が使えない不確定な出来事に関しては、(4a)-(4c)が示すように、ほとんど「はじ」がカバーしている<sup>11)</sup>。

- (3) a. 20分も遅刻したけど、彼女は待ってくれているだろう。  
 b. 20分も遅刻したけど、彼女は待ってくれているにちがいない。  
 c. 20分も遅刻したけど、彼女は待ってくれているはずだ<sup>12)</sup>。  
 d. 20分も遅刻したけど、彼女は待ってくれているかもしれない。
- (4) a. 20分 に一くなたしが、あれー まっちとうら-ちよーる はじ。  
 b. 20分 に一くなたしが、あれー まっちとうら-ちよーる はじ/とうら-ちよーさに。  
 c. 20分 に一くなたしが、あれー まっち

とうら-ちよーる はじ／とうら-ちよーさに。

d. 20分 に一くなたしが、あれー まっち  
とうら-ちよーんり うむいん。

(3a)-(3d) の日本語の例になるべく近い意味の沖縄語訳が (4a)-(4d) であるが、実際は「だろう」「にちがない」「はずだ」「かもしれない」に対応する明確な使い分けが存在するわけではない。沖縄語の「はじ」は、①「筈。当然どうあるべきこと」②「(主として、文末で) だろう。だろうということ。多分…だろうという推量の場合に用いる」(『沖縄語辞典』1963: 210) という二つの意味があると記されている。一つ目の意味は、しきたりや約束を守る、または慣行通りにする、義理を満たすという意味で、②の推量と区別されている<sup>13)</sup>。

(4b) (4c) で用いられている「とうらちよーさに」という表現は tura-sjun 「～してやる」の持続態に推量助詞「さに」が接続した形である<sup>14)</sup>。この「とうらちよーさに」は、(4a)-(4c) に幅広く用いられている「とうらちよーる はじ」という表現に比べて、明確な区別はつけ難いものの、「(きっと) 待っててくれる」という確信がやや高い時に用いられる。よって、「ちがない」や「はずだ」に比べて表現として充ててあるが、「はずだ」のように論理的根拠に依るといっても、「ちがない」のように、不確実ではあるが高い確信がある時に用いられるようである。

日本語の「かもしれない」を使用する際の確実性は幅広いという指摘があったが(野田 1984)、(4a)-(4c) から判断すると、沖縄語においては、「はじ」の確実性が広いと言えそうである。しかし、(4d) が示すように、「かもしれない」の文には、「はじ」ではなく「～と思う」の形「んりうむいん(と思う)」が用いられている。「はじ」の使用に関しては、ただの話者の思い込みに依るものではなく、一般常識や動作主の習慣的な知識等、話者の判断の根拠となるものが必要である(Arakaki 2013: 108-113)。一方、日本語の「かもしれない」は、2.2.2でみたように、「話し手がある事柄を推量するのであるが、その推量が当たっているかどうか自信がないということを表すのが基本」(野田 1984: 114) であるため、ある一定の根拠が要求されていない。そのため、話者の考えとして述べる(4d)の「んりうむいん(と思う)」が「はじ」よりもより

適切だと考えられる。

この項では、日本語の「だろう」「はずだ」「にちがない」「かもしれない」にどのような沖縄語の表現が対応するか見てきたが、「だろう」「はずだ」「にちがない」に対しては、「はじ」で対応できることが分かった。厳格な使い分けはないが、沖縄語「はじ」は「かもしれない」よりは明確な証拠がある場合に用いられる傾向があり、両者のカバー領域に多少差異があるという可能性を指摘した。

### 3. 4 ウチナーヤマトウグチ

ウチナーヤマトウグチについても総合的・体系的モダリティ研究は発達していない。ウチナーヤマトウグチの先駆的な研究には高江洲(1994)があり、その中ではモダリティに特化した記述はないが、「はず」や「みたい」のような推量的な表現を含む例は挙げられている。「はず」は「根拠のあるなしにかかわらず、推量をあらわす」(高江洲 1994: 277)として以下のように述べている。

標準語ではたしかさの程度によって「～と思う」「～のようだ」「～らしい」「～にちがない」「するはずだ」などのようにつかいわけけるが、ウチナーヤマトウグチではつかいわけの分化がみられず、根拠がなくはっきりしないことを推量するときも、ある根拠にもとづいて推量するときも、「するはず」の形をもちいる。

(高江洲 1994: 262)

このようにウチナーヤマトウグチの「はず」は、日本語のように細かい使い分けをもたない。そのため(3a)-(3d)の日本語の文に対応するウチナーヤマトウグチの例は、(5)に統合されうる。

(5)20分も遅刻したけど、彼女は待っててくれているはずよ。

(5)が示すように、ウチナーヤマトウグチの「はず」は、(3a)-(3d)の意味を含み、日本語の「はず」に比べて広い意味範囲をもつ。実際、ウチナーヤマトウグチの「はず」の使用に関して、「話し手は20%～100%の確からしさをもちて発話しており、聞き手としては、

10%~100%の確からしさを期待して受け止めていた」(葦原2015: 84)という報告もあり、根拠が明確な時も不明確な時にも使用されることが分かる。しかし、年齢層が高い話者はウチナーヤマトゥグチよりも沖縄語「はじ」に近い「予定」を表すという報告もあり(市原2006: 14)、年齢や沖縄語、または共通語の認知度によって使用範囲や意味が異なることが考えられる。次章で指摘するように、このような言語背景の個人差は、L2のどの推量表現を選択するか影響を与える可能性があり、個人差、言語差に対する認識も少なからず必要になってくる。

#### 4. 英語教育における問題点

英語、日本語、沖縄語、ウチナーヤマトゥグチの4言語の認識的モダリティに関して概観してきたが、英語教育という視点から考えると、以下の3つの問題点が考えられる。

まず1点目は、SHOULDとその対訳日本語の「はずだ」が示す意味にずれがあることである。3.1.2でみたように、認識的SHOULDは、直接的証拠に基づかない自信の無い想定や可能性(コーツ 1992)や抽象的認識(澤田 2006)について言及する際用いられるにもかかわらず、認識的SHOULDが用いられている英文の訳は、論理的根拠が高い場合に用いられる「はずだ」(寺村 1984, 森山 1995, 三宅 1995)が当てられていることが、英語学習者の混乱の一要因となることが考えられる。

2点目は、琉球における特徴的な問題点であるが、沖縄語の「はじ」、そしてウチナーヤマトゥグチの「はず」が表す意味にもずれがあることが挙げられる。年齢により意味範囲の違いがありうるため(市原 2006)、教員が沖縄語の能力を備えていた場合、ウチナーヤマトゥグチよりも若干狭い沖縄語の「はじ」の意味範囲で「はず」を捉える可能性がある。そのため、学習者である若い世代のウチナーヤマトゥグチ「はず」が解釈する意味と、目標言語の例文や使用されるコンテキストに関して解釈に差異が生じる可能性もあり、指導の際に留意する必要があるであろう。

3点目に、論理的根拠が高い場合に用いられる日本語の「はず」と、琉球におけるウチナーヤマトゥグチの「はず」の意味の間に著しい差があるという点が挙げられる(高江洲 1994, Arakaki 2015, 葦原 2015)。

認識的SHOULDの訳として「はずだ」が当てられていると、ウチナーヤマトゥグチをL1とする学習者が、認識的SHOULDの意味範囲を確定的根拠のないウチナーヤマトゥグチ「はず」の意味範囲まで拡大して捉えてしまう可能性がある。実際に現場ではshouldを用いるべき英語訳の箇所に、ウチナーヤマトゥグチをL1とする学習者がmay, mightなどと混同する誤用がよく見られる。

このような混乱を避けるために、教授する側が、学習者のL1の意味的特徴を認識する必要があることはもちろんではあるが、1章で触れたGTMなどの訳を介する教授法の限界を認識し、学習者が言語を発しなければならぬ状況を与え言語使用を促進するTask-Based Approachなどを取り入れた訳に頼らないCommunicative Language Teachingの手法による補強が必要になってくるであろう。

#### 5. 結論

本稿では、英語、日本語、沖縄語、ウチナーヤマトゥグチにおける認識的モダリティの比較考察を行いながら、学習者を取り巻く言語使用の実態に合わせた教える側のL1の理解と訳に頼らない教授法の必要性を述べた。本稿で挙げた各言語の認識的モダリティの大まかな意味(根拠や自信等)の違いは、L2教育においてその違いに留意する必要性を認識するのに十分であろうが、短い論考では、各言語のそれぞれの表現の特徴を十分描写することはできない。今後、量的、質的な研究が望まれる。また、本稿では沖縄語とウチナーヤマトゥグチについて考察したが、琉球諸語のその他の言語に関しても同様の研究が行われる必要があるだろう。

#### 註

- 1) 琉球諸語の詳しい記述は、沖縄大学地域研究所(2013)や、下地&ハインリッヒ(2014)を参照。
- 2) 琉球諸語の話者を60歳以上とすると、話者は約35万人と概算されている(Ishihara 2014)。
- 3) 後に「琉球クレオロイド」の名称を使用(かりまた 2012: 13)。
- 4) ロング(2010: 27)は、中間言語、ピジン、クレオール、ネオ方言、クレオロイド、コイネ、そして混合言語などの定義を明確化し、「ウチナーヤマトゥグチ」をこれ



らのいずれかに該当するか検証しているが、いずれの概念とも異なるとし、新たな概念を打ち出す必要性を指摘している。

- 5) 「ウチナーヤマトゥグチ」という名称は、奄美語の接触言語である「トン普通語」や八重山語、宮古語、与那国語が日本語との接触により誕生した接触言語は網羅しないことを考慮すると、正確な用語の選択ではないという指摘があるかもしれない。しかし、ロング (2010 : 27) が指摘しているように、どの専門用語とも正確な合致がみられない段階であるため、高江洲 (1994) を広義の意味合いで解釈することとした。
- 6) Palmer (2001 : 22) は、さらに下位分類しているが、ここでは大枠の確認のみに留める。
- 7) コーツ (1992) は、2種類のコーパス、Lancasterコーパス (現在のLancaster-Oslo Bergen (LOB)) とロンドン大学のSurvey of English Usageコーパスからデータを採り、英語法助動詞に関する大規模なデータ分析を行った。
- 8) 益岡 (1991 : 45) は、日本語以外の言語を対象とした研究では、このような文構造の独特の捉え方を見出すことはできないとしている。
- 9) 野田は「かもしれない」に関して、会話の中で聞き手に配慮して表現をやわらげる譲歩的な使用もあると指摘している (1984 : 115-116)。
- 10) 宮良 (2002)、または Shimoji & Pellard (2010)、Patrick et al. (2015) などの各言語解説にモダリティの記述分析がある。
- 11) 情報提供話者は、浦添市在住1938年生まれ (79歳) 男性。
- 12) 例文 (3a)-(3c) は、三宅 (1995 : 190) より。(3d) もモダリティ部分以外は同じ文に統一した。
- 13) 内間&野原 (2006) には②の推量の意味のみ掲載されている。
- 14) この推量助詞「さに」の「さ」は、「述べることを相手に対して軽く強調する場合に用いる」(『沖縄語辞典 1963 : 451』)、または、客体化の表現 (上村1961 : 350) の接辞「さ」とは異なる。吉屋 (1999 : 248) は、「～し、あゆん」の未然形「～し、あら」と否定助動詞「ん」、可否疑問助詞「み」から成る推量助詞としている。

## 参考文献

Arakaki T. (2013) *Evidentials in Ryukyuan: The Shuri Variety of Luchuan — A Typological and Theoretical*

- Study of Grammatical Evidentiality* ( Brill 's Studies in Language, Cognition and Culture,4) Boston:Brill
- Arakaki T. (2015) A Comparative Study of the Evidential/Epistemic Markers: *hazi* in Ryukyuan, *hazu* in Uchinaa-Yamatuguchi, and *hazu* in Japanese. *Okinawa Christian University Review* No.12, 15-27.
- 葦原恭子 (2015) 「沖縄県の地域共通語『～はず』のモダリティ—大学生をとりまく自然会話の分析を通して—」『学芸国語国文学』47. (嶋中道則教授・加藤清方教授 退職記念号 ; 加藤清方教授退職記念論文) 72-85.
- Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford : Oxford University Press.
- 藤田ラウンド幸世 (2015) 「学校教育の中で言語継承への気づきを育てる—沖縄県宮古島市での自尊感情につなげる教育実践—」『教育研究』(57), 175-182. 国際基督教大学.
- Gass,S & Selinker, L. eds. (1983) *Language Transfer in Language Learning*. Issues in Second Language Research. Newbury House Publishers.
- 市原乃奈 (2006) 「共通語と高校生が使用するウチナーヤマトゥグチ「～はず」形態の比較・分析—「不思議」という語を中心として—」『文学研究論集』第24号1-19. 明治大学大学院.
- Ishihara, M. (2014) Language Vitality and Endangerment in the Ryukyus. In:Anderson, M. and Heinrich, P. (eds.) *Language Crisis in the Ryukyus*, 140-168. Cambridge Scholar Publishing.
- かりまたしげひさ (2008) 「トン普通語・ウチナーヤマトゥグチはクレオールか —琉球・クレオール日本語の研究のために」『南東文化』30 55-65.
- かりまたしげひさ (2012) 「琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき」『琉球の方言』36号9-28.
- 国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』財務省印刷局.
- コーツ, ジェニファー (1992) (澤田治美訳) 『英語法助動詞の意味論』研究社出版.
- Lightbrown, P.M. & Spada, N. (2013) *How Languages are Learned*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- ロング・ダニエル (2010) 「言語接触論から見たウチナーヤマトゥグチの分類」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部 編No.428. 1-30.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 三宅知宏 (1995) 「チガイナイとハズダとダロウ — 概言の



- 助動詞②-」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法 上』190-196. くろしお出版.
- 宮良信詳 (2002) 「沖縄中南部方言動詞のモダリティ」『言語研究』第122号79-113.
- 宮良信詳 (2011) 『ジャポニック語族の中の琉球語派: 系統、体系、および現況』パトリック・ハインリッヒ&下地理則 (編)『琉球諸語記録保存の基礎』東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (言語ダイナミクス科学研究プロジェクト) 12-41.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2 - 意味と使い方』角川書店.
- Moseley, C. (ed.) (2009) *Atlas of the World's Languages in Danger*. Paris: UNESCO. <http://www.unesco.org/culture/languages-atlas/> (アクセス日 2017年8月15日).
- 森山卓郎 (1995) 「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞〜の - 不確実だが高い確信があることの表現 -」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法 上』171-182. くろしお出版.
- Murphy, M. L. & Koskela, A. (2015) *Key Terms in Semantics*. London: Bloomsbury Academic. 今井邦彦 (監)『意味論 キーターム事典』東京: 開拓社.
- 永田高志 (1996) 『琉球で生まれた共通語 琉球篇』おうふう.
- 中右実 1994 『認知意味論の原理』大修館書店.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』くろしお出版.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』くろしお出版.
- 野田尚史 (1984) 「〜にちがいない/〜かもしれない/〜はずだ」『日本語学』3-10. 111-119. 明治書院.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 沖縄大学地域研究所 (編) (2013) 『琉球諸語の復興』芙蓉書房出版.
- Palmer, F.R. (1990) *Modality and the English Modals*. Second edition. London and New York: Longman.
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and Modality*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Patrick, H., Miyara, S., Shimoji, M. (eds.) (2015) *Handbook of the Ryukyuan Languages*. Handbooks of Japanese Language and Linguistics 11. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Richards, J. (1970) A Non-Contrastive Approach to Error Analysis. Paper presented at the TESOL convention, Sun Francisco, March 1970. [https://archive.org/stream/ERIC\\_ED037721#page/n1/mode/2up](https://archive.org/stream/ERIC_ED037721#page/n1/mode/2up)
- 琉球新報社 (2016) 『沖縄県民意識調査報告書』琉球新報社.
- 真田信治 (2009) 「方言研究の新たなる出発」『月刊言語』38 (12) 大修館書店 44-49.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』開拓社.
- 下地理則&パトリック・ハインリッヒ (2014) 『琉球諸語の保持を目指して 消滅危機言語をめぐる議論と取り組み』ココ出版.
- Shimoji, M. & Pellard, T. (eds.) (2010) *An Introduction to Ryukyuan Languages*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- 蔣家義 (2010) 「モダリティ分類の一試案 - 文法化の研究成果と『関与』の概念による -」『言語と交流』第13号64-78.
- 高江洲頼子 (1994) 「ウチナーヤマトウグチ - その音声、文法、語彙について -」沖縄言語研究センター (編) 『沖縄言語研究センター報告 3 那覇の方言 那覇の方言』沖縄言語研究センター 245-289.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.
- 上村幸雄 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題点 7 沖縄本島」東条操 (監) 『方言学講座』第四卷 (九州・沖縄方言) 334-357. 東京堂.
- 内間直仁、野原三義 編著 (2006) 『沖縄語辞典 - 那覇方言を中心に -』研究社.
- 吉屋松金 (1999) 『実践うちなあぐち教本』南謡出版.

# Remarks on Teaching Epistemic Modality in English Grammar —Influences from Grammar on the Indigenous Languages—

Tomoko Arakaki

## Abstract

What kind of influence does a first language (L1) have on the process of the second language (L2) acquisition? This study attempts to clarify the semantic differences of epistemic modality among English, Japanese, Okinawan, and Uchinaa-Yamatuguchi to elucidate key issues that should be noted in efforts to understand epistemic modality in the target language.

Three issues have been pointed out. First, the use of epistemic *should* does not require a speaker's direct evidence nor strong confidence; however, the corresponding translation of epistemic *should* is *hazuda* in Japanese which requires firm logical proof with strong confidence. Second, each teacher's language proficiency of the indigenous language (and their varieties) itself could be varied depending on the individual. Third, teachers should be aware of the semantic differences between the meaning of epistemic modality across Japanese, and Uchinaa- Yamatuguchi. In light of these points and their implications for teaching and learning, a Grammar Translation Method would likely be ineffective while other kinds of communicative approaches, such as Task-based Learning, would likely be more effective.

keywords: second language acquisition, first language, teaching method, endangered languages

